

霊の考察（人生学 第13回）

高 橋 清 隆

はじめに

霊というのは、大変扱いにくい問題です。

霊感がある人にとってははっきり見えたり感じられたりするもののようですが、私を含めた霊感がない人にとっては、あると言われても、あまり信じられないというのが正直なところです。

また、霊の存在がわからない人たちが、霊の存在を全く否定しているかという、そうでもなくて、霊が取り憑いていると言われて怖くなる人もけっこういるようです。そんなものは存在しないし、取り憑いたりもしないと断言できる人もまたあまり多くないようなのです。

霊が感じられない人にとっては確認しようがないわけで、それを利用した悪質な脅しもあり、見過ごせない問題だと思います。

霊について書かれた本はたくさん出ていて、どれが本当なのか、判断に迷う人は多いと思います。今回は、そうしたたくさんの中からの、的を射ている3冊を選んで考察していきたいと思います。

1 『ツインソウル』より

今回取り上げた3冊の本の著者は、いずれも霊が見えたり、霊を感じることでできる人たちばかりです。

一般に、霊が見える人たちは、特別な能力を持っていて、人格的に高いと思っている人もいますが、霊が見えるということと、人格が高いということは別問題です。また、霊が見えても、その意味をきちんと把握している人は意外に少ないようです。

そういう中で、私が思い描いていた霊の概念にいちばん近いのが、飯田史彦さんの『ツインソウル 死にゆく私が体験した奇跡』（PHP研究所、2006年4月5日）です。

この本は、著者自身の臨死体験が語られていて興味深いものです。むしろ、霊のことよりも、前半の、著者の死にかけた体験や、光との対話による人生の意義についての話こそ、中心になっていると思いますが、後半に語られる霊の問題も、霊について、この手の本の中ではいちばん的確に語られていると思われます。以下は、いずれも「光」の言葉です。

幽霊など、存在しません。幽霊というのは、物質世界の人間たちが創造した、空想の産物にすぎません。きちんと死ぬことのできない魂は、各地に派遣している私たちの同志たちが、すみやかに救い出すからです。（143ページ）

これは、イエスが、「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。」（マタイによる福音書第8章第9節より。同様の言葉がルカによる福音書第9章第60節にもある）と述べたことに当てはまります。

人間たちが「幽霊」と呼んでいるのは、その空間に、時間を超えて残っている、先人たちの強い感情や思いにすぎません。単に、それらの情報に、つながってしまうことがある、というだけなのです。（中略）

特に、悪意を持って人に危害を加えようとする幽霊、つまり「悪霊」など、決して存在しません。そのことを、人間たちに、適切な方法で伝えてください。そのためには、あなたのおっしゃる「残存思念」のしくみについて、人々に、正しく理解してもらうことが有効です。（143ページ）

そして、いわゆる「幽霊」については、その後の、第三章「神秘の扉を開く」の第二節で、「幽霊」現象のしくみ、という題で詳しく述べています。

自分が肉体から離れ、「あらゆる存在とつながっている」ことに気づいた時のこと……私は、「確かに無数に存在しており、つながることはできるが、こちらからメッセージを送ろうとしても受け取らず、まったく反応が無い、不思議な魂たち」が、地上にあふれていることに気づきました。

そこで、「なぜ、この魂たちは、反応しないのだろうか？」と、興味深く確認してみたのです。すると、なんと、その無数の魂たちは、実は「生きて存在している」のではなく、意志をもって活動している意識体ではないことに、気づいたのでした。

つまり、それらの無数の存在たちは、「光」たちも教えてくださったように、決して「魂」ではなく、単なる「情報体」であり、具体的に言えば、「そこに存在した人間たちが抱いた、思念（思考や感情）のかたまり」にすぎませんでした。（170ページ）

たとえば、ある病院から、「先月に亡くなった看護師さんの幽霊が出る」という連絡があって、確認したみたところ、看護師さんの魂など、病院の中には、まったく存在していませんでした。むしろ、その看護師さんは、素晴らしい仕事をされ、多くの仲間たちや患者さんたちから感謝されながら旅立ったので、今はまぶしい光となっていらっしゃるはずであり、決して「幽霊」になってさまようわけがないのです。

しかし、同僚の看護師さんたちは、「リネン室で働いているのを見た」など、かなりの人数の方々が、たびたび、先立った看護師さんの幽霊を見たとおっしゃるのです。看護師さんたちが、そんなウソをつく理由は、なにもありませんでした。

そこで、看護師さんたちが幽霊を見たという場所に、実際に行って確認してみると、私には、すぐに原因がわかりました。看護師さんの幽霊が現れるという場所には、強烈な「残存思念」が残っていることが確認できたからです。それらの場所には、先立った看護師さんが、さまざまな理由で

「強烈な感情」を残していたため、同僚の看護師さんたち、特に、その中でもスピリチュアルな能力の強い看護師さんたちが、その「残存思念」を感じ取り、自分なりに脳の中で視覚化し、「幽霊」のイメージとして認識していたのです。（170～171ページ）

「残存思念」というのは著者の造語ですが、わかりやすい言葉です。要するに、そこにエネルギーの乱れが起きているだけであり、それをいくら浄霊、除霊しても、労力の無駄というものです。例えば悪いですが、おならをしたところはしばらく臭いのであり、そこを浄霊、除霊しても仕方がありません。そういう残存思念がしつこいのは当然のことです。ある人が何度も何度もこだわって考えたことがエネルギーとしてたまっているのです。いくら言っても聞く耳を持たない霊が存在するということを書いている本がありますが、本質の捉え方が違うのだと思います。

第二章でご紹介した「光」たちの言葉の中に、「悪霊など、決して存在しない」というメッセージがありました。私自身の、過去二十年以上にわたるスピリチュアルな経験をもとにしても、同じように断言することができます。（中略）

ただし、『生きがいの創造 II』において、私自身が経験した多数の実例を示したように、光の姿に戻らない（戻れない）魂も、次のような特殊な場合にのみ、確かに存在します。

「その魂が、自分が死んだことを気づかない時」

「その魂が、自分が死んだことを認めたくない時」

しかし、これらの魂は、決して悪意を持っているわけではありません。これらの魂に接する人間の方が、ビックリしたり、怖がったり、嫌がったりして、あたかも「悪い魂」のように解釈し、恐怖感で反応してしまうことだけのことなのです。しかも、このような「光の世界に戻らない魂」も、数としては、「めったにいない」と表現できるほど少ないことを、私の経験を通じて断言しておきましょう。そのうえ、第二章で「光」がおっしゃっていたように、ごくまれに、ウロウロしかける魂がいても、「光」たちをはじめとする「救済担当の魂」たちが、すぐに光の世界へと導きますから、一般の方々が遭遇する可能性は、限りなくゼロに近いのです。（174～175ページ）

中途半端に靈感のある人は、自分が見えているものが、存在すると思ってしまう。悪意がなく、悪霊がいると言っている人もいるかと思います。けれども、いくら悪意がなくても、相手を怖がらせるのであれば、悪意以上にマイナスの影響を与えてしまいます。無知は怖いものです。悪霊はとり憑くものではなく、自分が引き寄せている、あるいは、より正確に言うと、自分がつくり出している、無知やこだわりや恨みと言えでしょう。特に、恨みは無知の極致と言えます。すなわち、人にひどいことをされるのは、理由がないことはありません。前世で人にしたことが自分に来ているだけのことであり、自分が蒔いた種なのです。それがわからず、人を恨んでばかりいる人というのは、人生の本質が見えていないのです。

いずれにしても……「悪霊」よりも怖いのは、「悪霊」という言葉を巧みに操り、「悪霊」が憑いている」などと人々の恐怖心を利用しながら、お金を巻き上げようとする、生身の人間たちの方だということを、忘れてはなりません。どれほど穏やかな顔つきで、どんなに優しい言葉をかけてくれる人であっても、「あなたには悪霊が憑いているから……」などと失礼なことを口にする人を、絶対に信じてはなりません。

少し考えればわかることですが、本当にスピリチュアルな能力を持っており、正しく使おうとする人ならば、人の心にマイナスの効果しか与えない「悪霊」という言葉など、使うはずがないのです。あなたには、「神」や「仏」や「天使」が「つながって」いてくださることはあっても、「悪霊がとり憑いている」ということは、絶対にありません。そのことを、心底から信じるこそが、あなたを、自分自身で強力に守ることになるのです。(178ページ)

ここで述べられていることはとても重要です。脅すような言葉、相手を不安にさせるような言葉を口にする人は、どんなに霊がはっきり見えていたとしても、人生をきちんと理解してはいません。相手に対して、悪霊が憑いていると言うのは、安易な、そして誤った風習と言えるのかもしれませんが。むしろ、その人の憎しみや無知が悪霊のように見えることがほとんどなのではないでしょうか。その意味で、霊はとり憑くのではなく、自分が生み出したり引き寄せていたりするというのは、理にかなった言い方のように思えます。

2 『「気づき」の幸せ』より

木村藤子『「気づき」の幸せ』（小学館、2007年5月13日）の前半は、著者のおいたちや霊能者になった経緯等が書かれていますが、後半は、著者の透視（著者は霊視のことをこのように表現する）のことが書かれています。

私のところへ救いを求めてくる人は、悩み、苦しんで、どうにもならなくなって来ます。ところが、私が問いかけると、きれいごとしかいわない人や私の話を聞こうとしない人がいます。

(88ページ)

私を訪ねてきた相談者で、自分の悩みや事情をしゃべり続ける人がいます。私はその人も置かれている状況も、透視で必要な事を見えていますから、くわしく話してもらう必要はありません。

「私が質問した事にだけ答えてほしい」とお願いするわけですが、この意味をなかなか理解されない人が多いのです。

相談者が私に質問したい事を聞いてきます。それについて私は神から聞いた事を解答する役割を持っています。

おしゃべりしたい、訴えたいという事がある人は、これはカウンセラーのほうへ行くべきであっ

て、私はカウンセラーではなく、カウンセラーの方々の様に知識ありません。私の知識が不十分だとしたならば、大変その人の人生をあやまらせてしまうという事を考えます。

私はカウンセラーではありません。相談者に聞かれた事に対して神の言葉を伝えるだけの存在です。（92～93ページ）

ここで著者が言っている言葉で誤解しない方が良くと思われるのは、自分が語るのは神の言葉だから黙って従いなさいということではありません。神の言葉であろうとなかろうと、従うか従わないかは、その人の判断によればいいのです。ここを引用したのは、著者に相談に来る人たちの自己中心さにあきれたからです。それぞれの例を読むと、相談者自身が、自分勝手な考え方や行動をやめれば解決することばかりだったからです。著者は、カウンセラーのほうに行くべきと書いていますが、こんな人たちが来たら、カウンセラーも困るのではないかと思います。自分は悪くない、悪いのはまわりのせいだと主張するだけで、自分の考え方や行動を変えようとしないうちに、どうアドバイスしても無駄なような気がします。私が霊能者なら、あなたがそれを変えなければいつまでたっても解決しないと言いたくなる相談者が多いのです。

「私の部屋に誰かが侵入して、私を困らせています。誰なのか教えてください」

といって、関西から来た20代の女性がいます。透視すると、彼女の部屋は散らかり放題です。最近、「片づけられない女」が多いといわれますが、彼女もその一人で、ごみが散乱した部屋にいます。

ですから、自分でも探し物が見つからないで困っているのです。にもかかわらず、誰かが侵入して、ものを持ち出しているといいはります。「家宅侵入の犯人を見つけてください」というのです。

一日中、家にいる彼女の母親が、「誰も侵入していない」と断言しているのですが、被害妄想に駆られています。そして、私が何をいおうが、母親が何をいおうが、聞く耳を持ちません。

（113～114ページ）

この女性は、悪い霊が入ってきて、物を隠しているとでも言ってもらいたいのでしょうか。

これはまだ滑稽な面もある例ですが、仕事の相談に来た例は、本当にあきれる話ばかりです。

ある女性は、自分の能力に合った職場を教えていただきたい、といいました。

「これまで一生懸命仕事をしてきましたが、周囲の人に陥れられてしまうのです。もっとのびやかに実力を発揮したいのです」

その話し方には無駄がなく、理知的でいて物腰はとてもひかえめで、好感が持てました。入社試験の面接なら、即座に採用されるでしょう。

ところが、透視すると、プライドが高くて、いつも自分にスポットが当たっていないとがまんならない姿が見えました。自分のプライドを守るためなら、人を蹴落としても平気で笑っている姿が

見えます。(中略)

こうした事実を伝え、彼女の考え方を変えることによって人生も変えられる、と述べると、彼女の理知的でいてかわいらしい表情が、みるみる変わりました。そして、こういう人の特徴らしく、憎しみのこもった目で私を見据え、口はぴたりとつぐんでしまいました。

ようやく口を開いたと思ったら、

「私は、次の職がいつ見つかるか聞きに來ただけなのに、とんでもないことをいって、私を貶めるんですね」(123～124ページ)

30代のサラリーマンCさんは、「これまでの仕事をやめたので、新しい仕事が見つかるか、占ってほしい」といってきました。

「いついつ、新しい仕事が見つかるか、見てください。それはどんな職種ですか」

と、たたみこむように聞いてきます。

神様におうかがいを立ててみました。

ところが、神様の教えは、Cさんの期待を裏切るものでした。

「Cは人の話が聞けない。そして、チームワークを大切にしなければならない仕事でも、独断でやって失敗してきた。だから、退職に追い込まれたというのに、それがわかっていない。たとえ新しい仕事が見つかって、またすぐにやめるだろう」

それを伝えると、自分のいたらなさには気づかず、「おれを使いこなせる上司がいない」といいます。

私はいいました。

「新しい仕事を探す前に、自分勝手な性格を見つめ直しなさい。人の話を聞けないワンマンぶりでは、仕事についてもまたすぐにやめざるをえない、と神様は告げていますよ」

「私はそんなことを聞きにきたんじゃない。いつ見つかるか、だよ！」

結局、私のいうことを聞こうとはしません。

「こんなとこ、来なきゃよかった」

そう吐き捨ててCさんは帰りました。(130～131ページ)

このように、著者に相談しに來た例は、本質的には、霊の問題ではなく、相談者が「自分が正しい病」を治せば、解決することばかりなのでした。

霊能者はたいへんだとつくづく思います。私にそういう能力がないのは幸いです。

個人相談をやめた霊能者がいるのですが、こんな人ばかりが来るのでは、やってられないという気持ちになるのも仕方がないことだと思います。

病院へ行って検査をしても、なんともないといわれたが、実際に体が痛くてたまらない、だるくて困る、などと訴えて、あちこちの宗教にすがったあげくに、私のところに来る人もいます。

40代のOさん夫婦は、どこかの宗教家に、「南北朝時代の祖先の霊がたたっている。だから男の子が生まれず、子孫が絶える」といわれたとあって相談に来ました。また、妻の体調も心配の種だといいます。

それを信じてしまったこと自体、実におろかなことです。南北朝といえば、今から650年も昔のことです。

そこからOさんにたどり着くまで、いったい何人の祖先がいるでしょう。一代前の両親がいて、その両親にそれぞれ両親がいて……と計算してみてください。

ものすごい人数になるでしょう。その中にはいい人もいれば、悪い人もいるでしょう。地獄を這いずり回っている祖先もいるかもしれません。

そういう祖先も一気に飛ばして、南北朝の時代の祖先の縁切りをして、なんの意味があるのでしょうか。

（中略）実際に透視すると、更年期障害でした。

いいかげんな言葉に惑わされること自体、ある種の病気だといえましょう。

一般に先祖供養は大切な事だと考えます。しかし、先祖供養の意味を深く理解していない場合も見受けられます。人間は一般的に困ることがおきますと、「ご先祖様より自分が助かりたい」というのが本音のようです。ご先祖さまのために供養といますが、実は自分たち人間自身、助かりたいのです。（169～170ページ）

理解の足りない、中途半端な霊能者は、何かすると、ここに出てくる「宗教家」のように、先祖のこことを持ち出します。しかし、基本的に、先祖であれ何であれ、自分のこと以外で自分に何か起こることはありません。自分に起こることは、すべて自分の学びのために自分が計画してきたことです。自分が前世で、犯罪ばかりしていたり、人を傷つけてばかりいたとしたら、その後の生まれ変わりでいろいろ起こるのは当然であり、それを受け入れて、人にあたたかくすることだけが、それを乗り越える唯一の方法となります。

だいたいにおいて、自分のことばかり考えていると、体調も悪化しがちです。病気のいちばんの治療法は、他人への感謝と、他人にあたたかくしようとする気持ちです。それがなければ、どういう人も、いろいろよくないことが起きてきます。自分にばかり目を向けていないで、他の人のために何かすることを考える、他の人によりあたたかくできるようになるために自分を磨く、という気持ちがとんな時にも大切です。それに気づくために病気があらわれると言っても、あながち誤りではないのです。

引用した部分の末尾で著者は的確な指摘をしています。自分のことだけ考えた行動というのは、いつまでたっても解決をもたらしません。

その意味では、先祖供養も害をもたらすことがあります。私たちのつとめは、今生きているまわりの人たちにあたたかくすることです。自分にとり憑いた悪霊をとり払うために（実際はそんなことはないのですが）、毎日毎日先祖供養ばかりしていたとしたら、どうでしょう。町内会で行

う町の清掃活動の日も先祖供養ばかりしていたとしたら、その方が、よほど害があります。そういうことがあるからこそ、イエス・キリストは、弟子に、自分の父親の葬儀にも行かなくて良いと言っているのです。

先祖供養をする余裕があれば、ボランティアをした方が、はるかに霊障が取り除かれるというものです。そういうことを知らない自称霊能者が多すぎます。

3 『これでうまくいく【新版】人生のしくみ』より

靈感のある学生から、夜中に女の子の霊が部屋に来て困るという相談を受けたことがあります。その時は、勉強していればいいと答えました。生きている人間の友達でも、相手が一生懸命勉強していたら、帰って行くからです。しかし、自分で答えておいて、あまり良い答えだとは思いませんでした。その学生は、勉強はあまり好きな方ではなかったのです。

そこで、やはり別の靈感のある学生に相談すると、自分は盛り塩をしたりしている、とのことでした。一応、それも伝えたのですが、自分で納得の行く方法ではありませんでした。

これらの方法は、霊がいるとして、こっちへ来るなという方法です。除霊や浄霊も同じ考え方です。追い払っても、自分が引き寄せているのだから、結局はまた来ることになると思ったからです。

はじめに学生に相談されてから5年ほどたち、越智啓子『これでうまくいく【新版】人生のしくみ』（ヒカルランド、超☆ぴかぴか文庫、2011年9月30日）（『人生のしくみ』徳間書店、2003年6月に加筆・修正したもの）を読んでいて、ようやく納得が行く答えを見つけることができました。

「いまは、もう二十一世紀、霊を払っている場合じゃないのよ。これからは、霊に一瞬で光の世界へ帰ってもらうの、愛と笑いで。霊をタックルしたりハグしたりして、ついでにほっぺにチュをするのよ」

「えーっ、霊にキスするんですか？ 聞いたことない。どうやって霊を払うかを聞きに来たのに」
「岐阜の古戦場に行ったとき、鎧と兜を身につけたら血だらけの武将の霊に会ったのよ。ふと親しみを感じてハグしようとしたら、背が足りなかったから思いっきりタックルをして、ほっぺにチュをしたの。そうしたら彼の血走った目がさらに大きくなって、これは怒られるかなと覚悟していたんだけど、彼の大きな目から涙があふれてきて、鎧や兜が自然にはずれていったのよ。そして天から三人の美しい天女が白い光に包まれて降りてきて、彼を包んだの、それは感動の場面だったわ。彼の傷も癒されて、白い着物に変わって、天女と一緒に光に帰ったのよ。」

それから気をよくして、次々と、『タックルしてチュ』をやったら、どんどん霊ちゃんが成仏して、最後は引き気味の霊ちゃんを追いかけてまで、チュ！」

「えーっ、そんなことして大丈夫ですか？ 霊を追いかけてまでキスするなんて、聞いたことがありません」

「そうよ、前代未聞のことをするのが大好きなのよ。そのときの最後の霊ちゃんは、若い少年のよ

うな小姓で、槍を持っていたわ。びっくりして、ぽっと頬を赤くして可愛かったの。彼も、にっこり笑って光に帰ったわ」

「私には、気配が少しわかるだけで、霊は見えないのですが、それでもいいのですか？」

「もちろんよ、かえって見えないからやりやすいのよ。見えたら怖くてできないわよ。私は慣れているから平気だけど。気配や体を感じる重さで、何となくこのへんと思ったところで、抱きしめるしぐさをしたりイメージするの。それだけで、霊ちゃんにはちゃんと愛が伝わるのよ。ほっぺにキスができない人は投げキスでもいいし、背中をやさしくさすってあげてもいいと思うわ。これは、究極の浄霊法ね」（172～173ページ）

私は、このようなことを学び始めて20年近くになるのですが、これがいちばん良い方法のように思えました。

これまでの霊能者は、暗いものが多くて閉口していました。先祖のしたことの報いが来ているだの、自殺した人の霊が憑いているだの、ちょっとおかしいものが見えると、安易にそういうことにしてしまう人が多いのです。そして、しても仕方ない除霊、浄霊。相手の気分が多少は変わるので、一時的には霊がとれたように見えても、本人が否定的な思いをいただいていると、また霊が憑いているように見えてしまうのです。

それにしても、霊ちゃんにキスするというのは、思いつきませんでした。

霊のようなものが見えると除霊か浄霊というのが、これまでの伝統だったように思います。

伝統には、知恵のあるものもありますが、囚われもまた多いものです。

特に、あたたかくないものについては、考え直すことも必要があります。

例えば、「御苦労さま」「お疲れさま」というやりとりは、あまりよくありません。苦労した、疲れた、という言葉は、マイナスのエネルギーをもたらします。どちらも、「ありがとうございます」の方が、あたたかいように思います。「御苦労さま」は、立場が上の人から下の人に使い、「お疲れさま」は、立場が下の人から上の人に使うということになっていると思いますが、「ありがとうございます」でいいのです。「ありがとうございます」が使いにくい場合は、その場に応じて、「御苦労さま」「お疲れさま」以外の言葉を使うようにしていった方がいいと思います。

伝統の否定などと、大きくかまえる必要はありません。

越智啓子さんが教えてくれたことも、ほんとうはちょっと考えればわかることなのですが、そのちょっとが、囚われていると気づかないのです。

どうすれば正しいか、ではなく、どうしたら楽しいか、どうしたらあたたかいかな、どうしたら、誰も傷つけずに自分のまわりの人も笑えるか、という方向で考えれば、答えは出てくるのだと思います。

霊ちゃんが残存思念だったとしても、それは消せるのです。

越智啓子さんの本には驚きました。

残存思念を消せるわけではないと思っていたのです。

いろいろな人のいろいろな知恵によって、学んで行くのです。

今回は、飯田史彦さん、木村藤子さん、越智啓子さんから学ぶことができました。

学んでいくことは、ほんとうに楽しいことだと思いました。